

マレーシアのタマンネガラ国立公園 ——たった一人のツアー旅行——

立石友男

最近のマスコミでは環境問題が賑やかに取上げられ、なかには熱帯多雨林の破壊が今にも地球の破滅を招くような論調の書籍も出版されている。果して、熱帯多雨林は“地球の肺”といわれるような機能をもちあわせているのであろうか。そんな素朴な疑問があったので、数年ほど前にマレーシアとブルネイの熱帯林を観察に出かけた。

その際、マレーシア半島部では唯一の原生林といわれるタマンネガラ国立公園を訪れた。交通はいたって不便で、首都クアラルンプールからはバスを2ヶ所乗換え、さらにボートで3～4時間も土壌浸蝕で白濁色に濁った川を遡ることになる。私は自炊用具をもたなかったため、最も簡便なペランギ航空のツアー（3泊4日）を利用した。

まず驚いたのはイスラム暦9月のラマダン中は国立公園が閉鎖されることであった。そのため足止めされ、やっと空港に行くところにもペランギ航空のカウンターがない。ツアーだから多くの仲間がいるだろうと思ったが一人もいない。誘導されてきた航空機はYS11程度の双発機でマークは消されたままである。乗客はたったの三人、座席には団扇とジュースが置かれ、操縦室とのドアもない。しかも座席のいくつかは傾いたり破れたりしている。こんな飛行機で大丈夫かとかなり緊張し、眼下を観察する余裕もなかった。

約50分ほどでタマンネガラ空港に着陸したが、タラップがなく副操縦士が2段梯子をおろす。滑走路は赤褐色のラトゾルを突固めたものでairstripとかairfieldと呼ぶが、100m以上も離れて真新しい四阿屋があるのみで、人影はない。航空機はすぐに離陸し、熱帯林の中に一人だけ取残されてしまった。度胸をきめて待つこと20分ほど、はるかかなたで子供ずれの老人（実は30才くらい）が手招きしている。近づくと黙って川辺へ案内し、そこには乗客5名を乗せたボートが待っていた。ボートは川を遡ること50分、公園の拠点クアラタハンに着く。ツアーだからと安易に考えていたが、これでは全くの一人旅である。

公園事務所は河床から20mほどの段丘面上にあ

り、若干の民家と宿泊施設が並んでいる。大部分は自炊ができるchaletで若者が多い。年配者は300mも奥へ行ったロングハウス型式の“ホテル”に泊る。広さは10畳ほど、真中に蚊帳を吊ったベットがあり、隅にテーブルが一つあるのみの殺風景な部屋である。テーブル上にはポットがあるがコップがなく、底にはコロイド状の澱がみられ、湯きをいやすには食堂で紅茶を飲むしかない。尤も紅茶では澱がわからないだけであるが。

遅い昼食をとりながらガイドからツアーの説明をうける。やっと説明にありついたが、この国では地形図はもちろん案内図も入手できないので、東京都と神奈川県ほどの面積（4,300km²）のどこを歩くのかわからない。仕方がないので概念図を書いた結果、本流テンペリン川に支流タハン川が合流するあたりに事務所があり、直ちにタハン川へ出かけること、夜は野生動物の観察に、また本流を遡るツアーがあることなどがわかった。

タハン川は半島部最高峰のタハン山（2,187m）から南流する河川で、兩岸から原生林が覆い、通直な樹木の多い熱帯林では特異な景観で一見に価値する。河水は泥炭湿地林特有の黒褐色をしているが、泳いだり魚釣りなどをする人たちもいる。魚類300種、野生動物250種といわれ、数ヶ所にobservation hideがある。シートをもって最も整備された小屋に行ったが、ベットは湿っていてカビ臭く、他の小屋にはベットもなかった。朝みると地面には一面に蟻がいて立止ることもできない。泥炭湿地林を歩くと、頭と尾の両方から吸血する長さ数cmものヒルが10匹ほども靴下の上から食付いていた。この地域の森林は熱帯モンスーン林に類似していて、ブルネイなどの泥炭湿地林よりも乾いているが、それでもジャングルを歩くには防虫スプレーが必需品である。

ツアーといっても行動する時間は短く、テラスでのんびりと本を読んだり昼寝をしたり、日本人の旅行スタイルとは全く異なっているのが熱帯地域である。